

「ポスト郷土中国」における養豚廃棄物処理の課題と展望 —安徽省南部の事例における郷土性の継承及び耕種畜産形態からの再考—

張 曼青 (ZHANG MANQING)

要旨

中国では近代化政策へと転換した結果、近年深刻な農業汚染に直面している。特に、畜産業の産業化に伴い、農業の専門化・分業化が進み、もともと耕種畜産一体化していた農業が変容し、畜産の主体と耕種の主体が分離して、市場向けの大規模な家畜飼育場が出現した。こうした主体の分離により、畜産業には廃棄物を消化するために相応の面積の圃場が設けられておらず、大量・集中的に発生する家畜排泄物を合理的に土地還元することができないまま、富栄養化、地下水汚染、土壌汚染や悪臭などの様々な汚染問題を引き起こし、農業汚染の中で最も深刻な問題として位置づけられている。これらの変化が迅速かつ顕著であったため、政府は畜産業で発生した大量の汚染問題に対し、飼育側を対象に処理技術の導入と飼養禁止区域の画定といった対応を遂行してきた。しかし、上記のような種々の規制基準が満たされたとしても依然として問題が散見されている。

このような近代化へ進行する中国農村社会、いわゆる「ポスト郷土社会」に現れた問題について、先行研究では「ポスト」という変化の一面に収斂し、変化に影響を与える各要素、主に政策、飼育農家の環境知識、技術の側面から議論している。しかし、伝統的な「郷土社会」においては、そもそも専門の養豚業者がおらず、同時に耕種と畜産を同時にこなし、少量の養豚廃棄物を自分の零細農地に施肥するという自己完結的なやり方が一般的であった。そこで、その土地々々の知恵と実践の経験によって、飼育と耕畜に関する知識と技術が、言説として表現できなくとも、慣習として身体に宿り、伝承されてきたという一面にも注目すべきであると筆者は考えた。

そこで本研究では、ポスト郷土社会における農業産業化への変換とそれに起因した廃棄物汚染問題に際し、改めて郷土社会からの継承に着目した。そして特に「郷土中国」における飼育者の具体的な畜産廃棄物処理の経験と知識が近代化への転換のなかでいかに実践の中で生かされ、または飼育者の実際の行動上生かされなかったのかについて探究することを試みた。調査対象地として、養豚業が流動性や分業化により大規模化が進んでいながらも、伝統的な農業形態が一部残されており、農業が産業化へ進行する途上にある「ポスト郷土中国」を代表する地域安徽省を選定した。そして2017年3月～2018年10月まで、安徽省南部の農村地にある飼育を営む零細農家や大規模飼育場を対象に、汚染処理と農地還元の状況について現地調査を行った結果、以下のようなことが明らかとなった。

まず、伝統的な農業や村落がまだ存在し続ける地域にて、継承されてきた畜産廃棄物に関する実践的知識や相互扶助の慣習を生かした調整を行いながら、畜産廃棄物の循環利用を達成している飼育場が確かに存在するという事実を現地調査により明らかにすることができた。ここでの畜産廃棄物の肥料としての価値について、耕種農家と畜産農家はともに長期的な農業実践のなかで心得ており、畜産業が規模を拡大した後に廃棄物が多量発生した状況下でも汚染問題を引き起こさなかった。

しかし、これらの経験や知識の活用には一つの目には見えない要素を必要とし、それは畜産・耕種主体間の「知根知底」に由来した「なじみ関係」である。なじみ関係について特に1.人に対するなじみ関係、2.ものに対するなじみ関係、3.1, 2の両者を踏まえて短期的利益損得を譲歩することとい

う3つの方面で独自の機能が発揮されていた。同時になじみ関係を利用することによって、相互扶助或いは連携に寄与しただけではなく、双方のギブアンドテイクによって、両方の関係がさらに再生産され、連帯性がより密接となった。

他方で、この隠れたなじみ関係の重要性は、政府規制による場所移転が実施された後にも浮上した。つまり、現段階のポスト郷土社会に置かれた中国農村社会において、畜産業者の実践的環境意識や廃棄物処理行動が最終的に環境保全に繋がらない原因には、場所の変化に伴う畜産農家と畜産農家のなじみ関係性による信頼関係の崩壊が大きい。さらに単なるなじみ関係の消滅というより、なじみ関係が活用できなくなった後、畜産農家の行為動機が行政命令を満たすという受動的なものとなり、そして、畜産廃棄物処理に対しては経済的収入に相当した労力しか割かなくなった。こうした影響が、畜産廃棄物処理行動の最終的な結果に如実に表れていた。

以上、本研究では畜産業者の実践を分析することにより、政府規制を満たしたとしても畜産廃棄物汚染が発生してしまう社会的な要因を考察することができた。無論飼育場が更なる大規模化を求めてやむを得ず場所移転をする場合も存在する。すでに場所移転した飼育場や将来場所移転をしなければいけない飼育場が、新しい土地にて耕種農家と連携関係をいかに実現するのかについて更なる検討は今後の課題とする。(環境行動学)